Novartis Web Live 講演会

『重症アレルギー性喘息の病態と治療戦略
～Biomarkerから考える生物学的製剤の使い分けを踏まえて～』

演者

松永　和人　先生

国立大学法人 山口大学大学院医学系研究科 呼吸器・感染症内科学講座 教授

・Web回線を介してお預かりしました質問についてはお時間の許す限り、演者の先生にご回答をいただく予定です。

●日　時

2019年 10月 30日（水）

第一部：12:30～13:15
第二部：13:30～14:15

●会　場

発信会場　ANAクラウンプラザホテル宇部より配信

聴講会場　ノバルティスファーマ株式会社　○○事業所
住所：○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
TEL：○○○（○○○）○○○○

聴講会場

※ 本講演会は、発信元となる会場とWeb回線を介してインタラクティブに行います。
万全の準備を行いますが、回線混雑等が原因で映像・音声が途絶える可能性もございますことを、予めご了解くださいますようお願い申し上げます。

主催：ノバルティスファーマ株式会社

『重症アレルギー性喘息の病態と治療戦略
～Biomarkerから考える生物学的製剤の使い分けを踏まえて～』

松永　和人　先生
国立大学法人 山口大学大学院医学系研究科 呼吸器・感染症内科学講座 教授

喘息初の生物学的製剤としてゾレアが本邦で発売され10年が経過しました。近年は多くの生物学的製剤が上市されゾレアしかなかった時代に比べ患者さん、医師にとっても選択肢が増えることによる恩恵がある一方で、どの生物学的製剤をどの患者さんに投与するべきか臨床現場の混乱があります。

生物学的製剤が対象となるような、難治性喘息の患者さんは本邦においても約5～10%存在すると考えられています。またその難治性喘息患者さんの半数以上はいずれかの生物学的製剤の適応があることが分かっています。

本講演では、ゾレアの良い対象となる重症アレルギー性喘息における「病態」「IgEの役割」「疫学」「アレルゲンの重要性」について改めて考察し、重症アレルギー性喘息の治療戦略について再考したいと思います。

また生物学的製剤の有効性を予測するためには実臨床で測定可能なバイオマーカーとして、IgE、末梢血好酸球数、呼気NOがありますが、現在、使用可能な生物学的製剤の導入基準は概ね重複しており、どのようにバイオマーカーを評価し薬剤選択をすべきかは明確でありません。今回は山口大学で実際に行っているバイオマーカーを用いた生物学的製剤の選択についてもご紹介する予定です。